

第3章 今後の対策に向けて

1 9年間の調査から見てきたこと

平成27年度にスタートした本調査は、当初計画していた9年間の調査最終年を迎えました。その間には新型コロナウイルスが拡大し、ライフスタイルの変化にともない子どもたちの生活習慣、学習習慣にも大きな影響がありました。

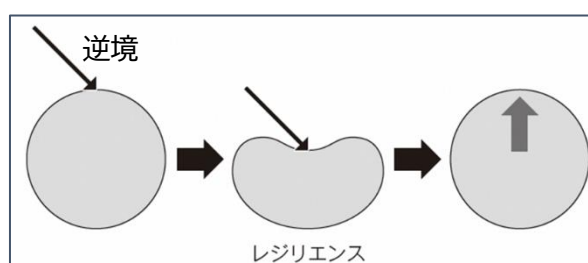
継続して定期的に調査を行い、東京科学大学及び国立成育医療研究センターが集計・分析して得た結果から明らかになったエッセンスを記載します。

(1) レジリエンス（逆境を乗り越える力）の重要性

レジリエンスとは逆境を乗り越える力で、ストレスや困難な状況をしなやかに乗り越え、変化しながら元に戻ろうとする強さです。

レジリエンスが高いと子どもたちがトラブルや困難な場面に直面した際、すみやかに立ち直ることができます。

イメージ図



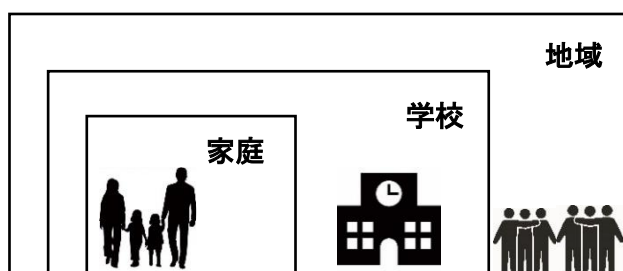
(2) レジリエンスを高めるために

ア ソーシャルキャピタルの影響

レジリエンスを高めるために必要な要素としてソーシャルキャピタルがあげられます。ソーシャルキャピタルとは人と人との関係性や結びつきを資源として捉える考え方です。人々が信頼し合って助け合うことで問題が解決され、社会全体を安定させる力となります。

子どもたちを取り巻く環境には「家庭」「学校」「地域」などがあり、様々な形で子どもたちに関わっています。調査を通して、家族との関係や社会的つながりと子どもたちの問題行動、または思いやりを示す行動や意識に関する質問を分析した結果、それぞれのソーシャルキャピタルが醸成され、より良い形で子どもたちの成長を見守っていくことが、子どもたちのレジリエンスを高めることにつながっていくことが分かりました。

ソーシャルキャピタル



レジリエンス



イ レジリエンスを高める可能性がある6つのポイント

9年間の調査から、子どものたくましく生き抜く力の源とも言える「レジリエンス」を高めるために統計上有意な事柄として、以下の6点が浮かび上がってきました。

① 思いやりの気持ち

思いやりのある子どもは我慢することができ、他者のことを考えて行動するといったことがレジリエンスを育んでいると考えられます。

② 挨拶ができる

挨拶は自己と他者との識別のスタートであり、挨拶を交わし合うことは互いを認め合うことに繋がります。

③ 野菜から食べる

好きなものではなく「野菜から食べる」といった少しの我慢を実践できた自分への肯定感を高めることができます。

④ ニュースを話題にできる

親子の関わりの中で、レジリエンスに特に関係しやすいと考えられます。社会の中で起きている出来事を難しいながらも聞くことの我慢や、他者を認識する力が育まれると考えられます。

⑤ ロールモデルを持つ

目標となる人や尊敬できる人との出会いによりモチベーションが上がり、困難に負けずに頑張ることができるようになります。

⑥ 親以外のケアしてくれる大人がいる

親以外に自分のことを「見てくれている」大人がいることが子どものアタッチメント（愛着）を補強し、ストレスに対応することができます。

2 調査を終えて

世界を突如襲った新型コロナウイルスの蔓延などこの不確実な時代に「子どもが自分で成長できるようになる」ためには、「家庭」「学校」「地域」の関わり方が重要です。

家庭では、未就学期だけでなく思春期が始まる時期においてもレジリエンスに大きく影響するのは親子の関わりです。また学校においては先生やクラスの友だちとの信頼関係の構築など、学校のソーシャルキャピタルを高めることも大切な要素です。地域の関わりにおいては、保護者が困ったときに相談する相手がいると子どもの健康面に良い影響をあたえることが明らかになっており、親が地域と繋がり、子どもが地域活動に積極的に参加できるような環境づくりに取り組むことが重要です。

子どもたちが将来の夢や希望を実現するため、「家庭」「学校」「地域」の立場で出来ることをサポートする体制や施策を展開することで、「未来へつなぐあだちプロジェクト（足立区子どもの貧困対策実施計画）」を一層充実させてまいります。

